

新NISA 投信運用を聞く

2024年1月の新たな少額投資非課税制度（NISA）スタートまで2カ月を切った。非課税枠は全体で1800万円に増え、そのうち最大で1200万円まで投資できる成長投資枠をいかに使うかが制度活用のカギとなる。成長投資枠

対象の投資信託として、運用会社各社が力を入れるファンドを取り上げ、運用担当者に戦略を聞く。今回はビクテ・ジャパンと東京海上アセットマネジメント。（聞き手は田村篤士）＝随時掲載

金保有、効果大きく 地政学リスクに備え

スティーブ・ドンゼ

ビクテ・ジャパン 運用・商品本部副本部長



ビクテ・ゴールデン・リスクプレミアム・ファンド

9月末の純資産総額は273億円。設定日は2020年6月26日。9月末のリターンは昨年末比で10.38%、設定来で40.21%。信託報酬は年率1.1275%。

――バランス型投信「ビクテ・ゴールデン・リスクプレミアム・ファンド」の特徴は。

「株式や金、債券に分散投資し、株式単独に比べて値動きを抑えている。例えば金は株式との値動きの相関が低く、分散効果が大きい。2021年ごろの世界的な低金利で債券の利回りを見込めない時に投資先として大きな役目を果たした」

「現在は株式の比重が高いので、バランス型投信としては比較的风险は高めといえる」

――運用体制は。

「私はビクテに17年在籍し、

スイス・ジュネーブや英ロンドンで運用経験を積み重ねてきた。22年8月から日本に赴任し、欧州拠点と連絡をとりながら東京で運用をしている。顧客に近いし、金融市場への流動性供給を測るうえで日銀の情報にも接しやすいと判断した」

「株式や債券で運用する別のファンドに投資することで、分散投資を実現している。例えば

金は現物資産を裏付けに持つグループ会社のファンドに投資している。スイスのグループ拠点に金を保有している」

――ポートフォリオはどう組

み替えてきましたか。

「20年6月の投信設定当初は株式と金ではほぼ半々を占めていた。その後は金融引き締めなどで世界的に金利が上昇局面になったので、利回りが見込める債券のウエートを徐々に高めてきた。現在は株式が4割、金が4割、債券・キャッシュなどで残りの2割を占める」

「債券の比率は高めたとはいえ、それでも金の低下ペースは抑え込んでいる。粘着性のあるインフレ、台頭する地政学リスクなどをにらむと、金の保有

は運用成果を安定させるうえで

欠かせない」

――今後の運用方針は。

「欧米は金融引き締め効果が出てくる。過去の引き締め局面をみると、景気後退のシナリオが避けられないだろう。株式の中身をかえていく。業績が景気動向で変動しにくい公益企業などの積み増しを検討していく」

「新興国は金融緩和に向かうところもあり、22年以降、新興国の資産に割安感が出てきている。新興国の株式や債券の投資魅力は高まっていく」

「一方、長期的にみれば、経済圏の分断の影響で世界的にイ

ンフレ率は高水準で推移しそうで、金は重要な資産であり続けるだろう」

――この投信のリスクは。「株式のウエートが高いので局面によっては運用成績が大きく変わる可能性もある。個人投資家は長期的なスタンスでこの投信に投資してほしい」

「運用資産のほとんどが外貨建てなので、仮に日銀が引き締め動き、円高が進めば運用成績にはマイナスになる。ただし日銀の動向はウォッチし、必要に応じて為替ヘッジなどもかけていくつもりだ」